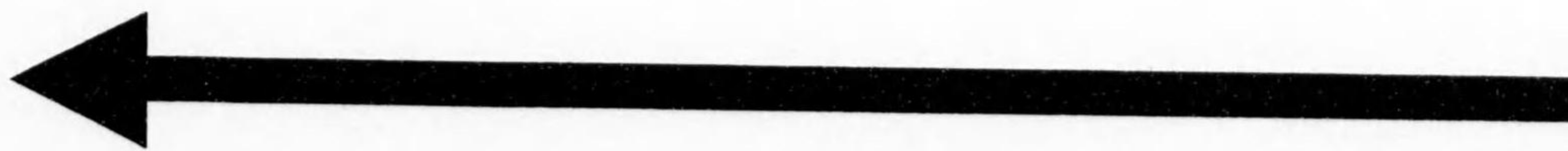


5 4 9

214



始





2.5.24



濱野斗南著

支那人氣質

東京 世界出版社





濱野斗南著

# 麥那人氣質

東京 世界出版社



東京 世界出版社





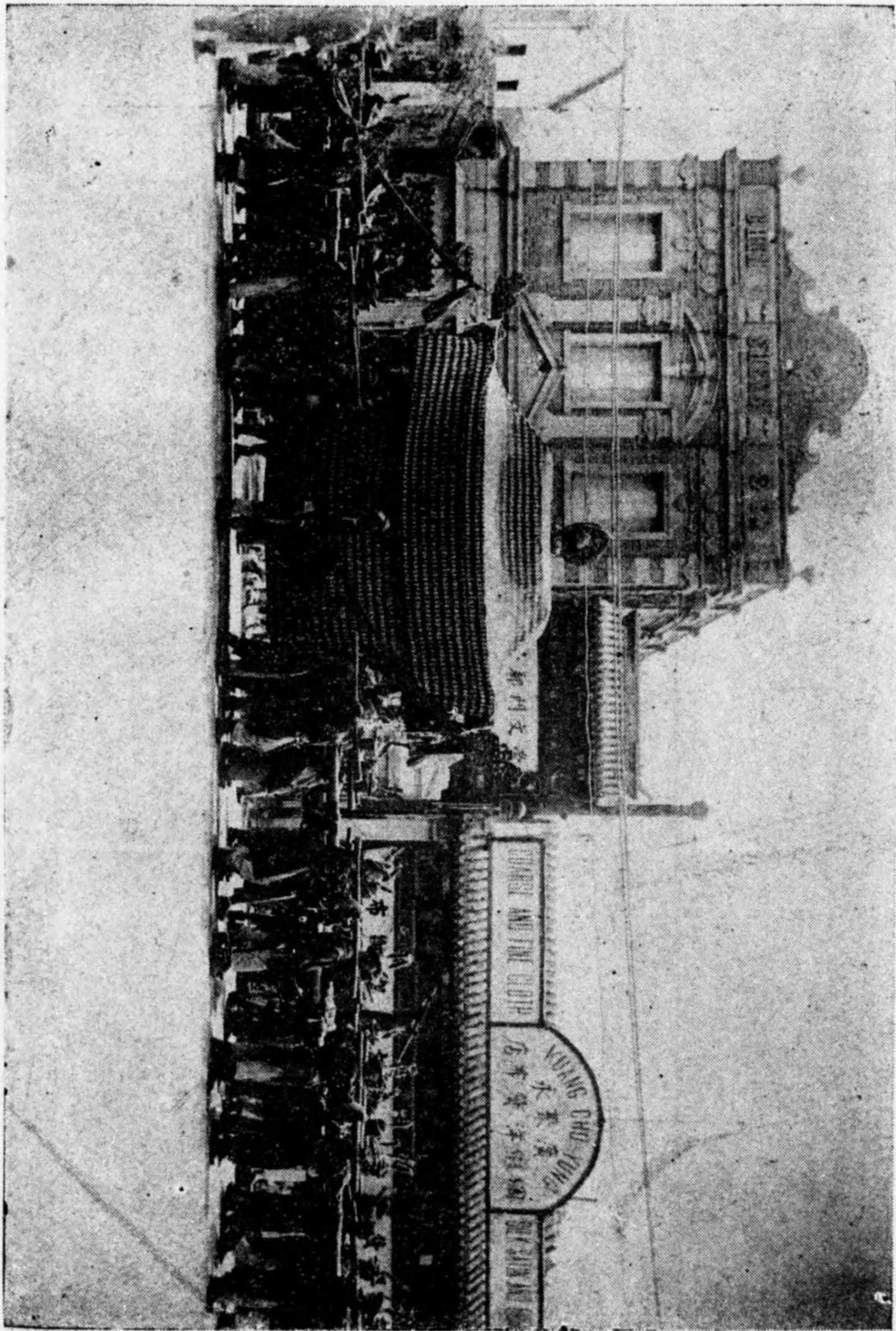
支那上流階級の花嫁花婿



549-214

### はしがき

人口四億四千萬、面積四百二十七萬八千三百五十二平方哩、北はシベリア、西北は露領トルキスタン、西南は印度、南は緬甸、佛領印度支那に境し、東は陸境朝鮮に接し海を隔て、日本と隣し、その未だ開拓されない自然的富源は優に世界の最富強國米國にも匹敵すと言はれ、四川省一省だけでも人口七千萬、植民地を合した日本のそれとほぼ同數で、同省の米鹽の産額は又日本々土のそれに相當すると云ふ支那の偉大さは、支那の地を踏んで始めて了解される所であるが、その尨大な點、莫然たる所が支那の支那たる所以である、従つて「支那の事は解らぬ」と云ふのが寧ろ真相で、解つたと云ふ者は即ち半知半解の徒で、支那は研究すればする程不可解になつて來るとは多くの支那通の一致した意見である、尤も所謂支那通と云ふても幾通りもあつて、單に支那を通つただ



榕の鐵葬へ歩り練な中市、列行大の書坊通交



けの支那通もあれば、年に一度か二度位仕事の上や見物の爲め支那に通ふ支那通もあるが、眞に支那の事情に精通した支那通は少い、此の最後の意味の支那通で支那の事を深く且つ永く研究した人程「支那の事は愈々不可解だ」と嘆聲を洩らす、人事に就て特に此の感がある。

「中國風土人民事物記」の著者タイヤ・ポール氏も「支那人に就ては其の觀察者の異なると共にその見方が全く違つて來る、或る者は餘りに買被るかと思ふと、又他の者は餘りに輕視し過ぎる、併し觀察の要はその中庸にある」と評して居る位でその國民性や氣質に就ての觀察は殊に困難で、矢張り「解らぬ」と斷言して了ふ方が得策かも知れぬが、著者はその「解らぬ」中に多少「解つた」點を讀者に紹介して支那研究者の資料の一としたいと思つて此の小著を企てた所以である。

著者しるす

目	次
一 南北の相違……………一	一 南北の相違……………一
二 南支那人……………四	二 南支那人……………四
三 北支那人氣質……………一三	三 北支那人氣質……………一三
四 南北支那人の共通點……………三六	四 南北支那人の共通點……………三六
	結 論……………六六



# 支那人氣質

濱野斗南



## 南北の相違

一口に支那と云ふがはしがきに述べた如く之を概説すべく余りに廣大無邊で  
あり、餘りに相違が甚だしい、人種的にも蒙古人、漢人、滿洲人、西藏人の相  
違あり、同じ漢人と云ふも北方人と廣東人とは殆ど異人種の感あり、氣候より云  
ふも朔風吹き荒む察哈爾、綏遠地方とバイヤ香る南國の廣東とは全く異域の  
差がある、北京人に向つて廣東では正月扇風機を廻しながら屠蘇を酌み餅を食  
すと云ふも多くは之を眞とせず、廣東では今より百二十餘年前空前絶後の雪が



降つた時市民はその何たるかを知らずして氷ならんと評したと云ふ虚の様な實話もある、言語上より觀察しても北京語は上海人に通せず上海語は又廣東人に解らず、廣東語は北京人には又不通である、同じ廣東省にあつて汕頭語は廣東語と異なり、福建省内にあつて厦門語は福州の言語とは全然別である、その差の甚だしきは日本の東北人と鹿兒島人との對話の比ではない、文字は時に同じ漢字を使用するも發音は全く相違し、殊に俗語に至つては眞に外國語で日本語と北京語の相違と隔りなし、例へば一二三が北京語ではイー、アル、サンと發音し廣東語ではヤツ、イー、サンと發音し、「何」と云ふことを北京語では「甚麼」と云ふが、廣東語では「セ野」と書き、「無い」と云ふ事を北京では「沒有」と云ふが廣東では「冇」と云ふ、「雨が降る」を北京では「下雨」と書き廣東では「落水」と書くの類である、言語だけではないその容貌にも北方人と南方人の間には著しい差がある、廣東人の體格が矮小で顴骨秀で鉛色でそのタイプは寧ろ

北支那人よりは日本人に酷似し。香港廣東間の通航船等で洋裝の廣東人と日本人とは全く判別に苦しむ事が多い、孫文氏が曾て支那服の某日本人を廣東人と誤認し、魏邦平氏が同じ廣東人たる趙士倫君(曾て早稻田大學野球選手たりし)を日本人と思つて「あの日本人は廣東語が非常に巧い」と評した實話は如何に廣東人と日本人が相似たるかを示すものであり、北支那又は中部支那で、支那語の解らぬ日本人が廣東人扱され、洋服着の廣東人が日本人と誤解さるゝ事は極めて有り勝ちな事である。

上に述べた如く人種的に、言語上、非常に相違した南方支那人と北方支那人とがその氣質に於て同様でない事は勿論である、時には却つて相反して居る場合もある、従つて今支那人氣質を書く上に於て支那人を南北に二大別して廣東人を主とした南方人と北京人を中心とした北方支那人とに就て順を追ふて此等の支那人の氣質特徴を考察して見やう。



尙ほ之が考察方法に就ては階級別、地方別、性別職業別等に分けて仔細に研究し、或は支配階級と被支配階級等に別けて之を観察する必要あるかも知れぬが、本書の目的が「世界知識に對する國民教育」てう通俗的の讀物によつて我が國民に世界的知識を與ふるにあるからして、茲には一般的通俗的に單に南北兩支那人に別けてその氣質の相違を述べる事とした。

## 二、南支那人

日本では支那と云へば北支那を意味し、吾人が一般に支那及支那人に就て有する知識も殆ど例外なしに北支那及北支那人に就てのそれである、數年前東京の某新聞が何かの機會に特別記念號として「支那號」を發刊して讀者に配布したが、その發刊の序の冒頭に「本社は本記念號發行に當り特派員を北は奉天北京より南は上海にまで派遣して記事材料の蒐集に努め」云々と手前味噌を並べ

て居たが、日本人の支那觀察と云ふと多くは上海止まりで北京に對抗して南方政府の首府たる廣東は兎角無視され勝ちである、併し此の傾向は歐米人にもある、例へば「古きを尙び過去を尊重するは支那人の天性で、保守主義は極端まで發揮され、之が爲め全國民の進歩は阻害されて居る」(ヘンリー)との評の如きも北支那人に就ての觀察であつて南方支那人殊に廣東人には當てはまらぬ批評で寧ろ廣東人は之に反した氣質の持主である、今南支人の特質とも見るべきものを擧ぐれば、

- 一、進取的な事
- 二、自治協同の精神に富む事
- 三、權利義務の觀念に鋭い事
- 四、排的外思想強し
- 五、氣早い事



等である、進取的な一例としては、大正十三年一月京都帝國大學教授矢野仁一博士が來粵された時の事である、廣東在住の日本留學生中、帝大出身者が發起で矢野博士を南園料理店に招待し、予も相伴したがその際、彼等廣東人は廣東市の改革と舊城壁の徹底的破壊等の意見を吐露して、同博士をして彼等の餘りに急進的なるに驚かしめた、尤も當夜の列席者は後に暗殺された國民黨工人部長廖仲愷、廣東省教育廳長許崇清、廣東大學教授周斯銘、何春帆等の新思想家ではあつたが、又死體を火葬にする事は他の一般支那人は極端に壓惡するが外交總長伍廷芳(廣東人)の死んだ時その子伍朝樞(前廣東市長)は特に日本人の火葬場を借りて亡父の屍體を茶毘の煙と化して新し振を發揮した、北支那では最も神聖な靈場と云れて居る墓地が廣東市の郊外では無造作に發掘され、或は全山墓地たる所まで切り開かれ、非道いになると道路に面した所に古い棺が半ば破壊されて露出し、その傍には「眞光公司建設敷地」等の符が建てられて

鐵筋コンクリートの建物が新設されつゝある有様である。

廣東人が自治の精神に富み團體的行動の協力精神に富める事も北支那人と異なる點で、之は廣東人が永年兵變、戰亂に苦しみ、政府官廳軍隊の頼むべからざる事を知つて、自ら守り自ら治むるの精神が發達したもので、彼の廣東商團軍、地方に於ける各民團軍と稱するものは此の實例で、他省にも自衛的の義勇隊の如きものはあつても廣東に於けるもの、様に優勢、且つ有力な組織の自治軍は他に類を見ない、此の商團軍は民國以來、外省の軍隊が廣東の富源を目指して侵入し來たものに對し、商民が一致團結して自衛的に組織したもので、民國十二年一月幾萬の客軍が陳炯明を驅逐して廣東に雪崩れ込んだ時も彼等は頑としてその守備に當つて自衛の目的を達した、その後民國十三年の秋、廣東政府軍の高壓的武裝解除と西關燒討の際、一時全滅の悲境に陥つたが、再起を豫期されて居る、此の種自治的義勇軍の完全な發達こそ將來支那を我利的軍國の



禍災より救ひ出すもので、そしてその牛耳を執るものは進取的、自治、協同の精神に富める廣東人ではあるまいかと信せられる。

次には南方支那人氣質の一特質としての権利義務の觀念に強い事であるが、同じ東洋人でありながら日本人などの想ひ及ばぬ點で、廣東人が常に香港政廳に對し、英國の資本家に對し正々堂々、秩序ある勞働運動或は愛國運動により勝利を得つゝあるのも、一つには有能な指導者を有する事にも因るが、その主な理由は前記の廣東人の権利義務の觀念に強い事にある、之が卑近な實例を家庭に使傭さる婢僕に就て觀る、或る家庭に雜用のボーイと料理人と俵夫と傭はれて居るとする、彼等は常にその職務の範圍と分担を相犯さなければかりでなく特に庭掃きを受持つ俵夫が病氣で缺勤してもボーイは庭掃除を敢てしない、たとへコックにボーイの雜用をなし得てもコックは決してボーイの仕事に干與しやうとしない、その代り自己の担任すべき職務の範圍に就ては忠實に之を履行

する、此の觀念は分業による各種勞工の仕事の範圍に就て極めて嚴重に行はれて居る。

領事裁判權の撤廢、租界回收等の運動が起されたのも權利の主張に強き廣東人によつてである、今は我が領土であるが台灣に於て對岸の福建、廣東兩省よりの移住民の多い所には法律上の權利義務の争より裁判沙汰極めて多く、辯護士業が繁昌する事實も南支人の特質の現はれである。

華僑（外國移住の支那人）と云へばその大部分は廣東人が福建人で、マレー半島と臺灣には福建語多く使用され、在米支那人間には廣東語が優勢である位で、南方支那は夙に海外の空氣に接し、民國革命の資金は大部分此等兩省出身の華僑によつて提供された程であるに拘はらず、南方支那人にはブローピンシヤリズムの弊甚だし、此の弊は他省の支那人にも存し、各重要都市にある各省會館なるものもその副産物だが、廣東人の外省人排斥は驚くばかりで、他省の



人と云へば全くの異邦人扱で、他省にあつても廣東人はその會館を以て敵國に於ける陣營とさへ見る、従つて廣東に於て何事かをなさんと欲すれば廣東人を表面に立てるか、多數廣東人を利用して名義だけでも廣東人を以てしない時は成立不可能である、日本でも南方の鹿兒島縣人に此のブロービンシャリズムの觀念強く、他縣人を外者よそものと稱して排斥するは、所謂芋蔓式とか薩閩と云つて知られて居るが、廣東人は又外省人を外疆ワイヤンと稱し之を卑しみ區別扱する、廣東國民政府の擁護者として省内に駐屯する雲南、廣西、湖南各省よりの軍隊も客軍と稱され、廣東軍からは外國軍隊扱された。

此の外省人排斥の氣質は異郷若くは外省に居住する場合、同省人間の相互扶助と防衛の爲め同類意識の結合となり、鞏固な團結を作るか、一方強烈な黨派的争闘となつて現はれ、黨中更に黨を作るの弊となり、外省人排斥は更に他縣人（支那では省の下に縣がある）排斥となり、同じ廣東人に香山縣派、新會

縣派、惠陽縣派を作つて、各自派勢力の擴張に苦心する事は非常なもので此の結果は他縣人、外省人を信頼せず、更に進んでは外國人を疑惑して強烈な排外思想の發露とはなつた、此の外國人に對する疑惑の養成には狂狷なる英國人、殊に香港商人が與つて大なる事は、見逃す事の出事の事實だが、「支那解剖」の著者で前總統府顧問フランク・グッドノウ博士は次の様な解釋をして居る。

「極端な省自治の制度は歐羅巴人との接觸によつて漸次に養成されたもので、最初の接觸は南方廣東に於てであつた、此の支那人が關係した歐羅巴人は明朝の末期に來朝した葡萄牙人であつた、明人は漢人種で滿洲人より以前の多くの支那統治者の如く、支那を征服した外國人の特質たる排外思想は一毫も持合せなかつた所が葡萄牙人が澳門マカオに占據し、次で和蘭人が來、その葡萄牙人や和蘭人が海賊の成上りの様な連中であつた爲め、支那人の間に歐羅巴人や基督教徒に對する偏見を挑發した、支那人が始めて接觸した此等の歐羅巴人から、歐



羅巴人と云ふ者は野蠻極まるもので、這麼手合からは商取引で金儲をする以外何の利益も得られぬとの信念を得たのは、又止むを得ぬ事で、斯くて廣東人の排外政策採用とはなつたのである」と。

北方で支那人の喧嘩口論するのを目撃して居ると、氣の短い日本人には間だるつこい感じがしてならぬ、彼等は一時間でも二時間でも時には半日でも口論はやつて居るが、手出しをする事は稀である、所が南方の支那人は慄悍であり氣早である、廣東人は議論で決せぬ時は直ちに腕力に訴へる、苦力俵夫の徒に至つても北方のそれとは全く反して居る、議論をすると共に實行家である、阿片戦争の當時廣東を占領した英兵の暴行に對し廣東の市民が憤慨して英兵を危地に陥れたのも有名な話で、北支那人に有勝ちな鷹揚な大人風な點は廣東人には見出し難い、鋭い才子風が代表的タイプである、一言之を動物に譬へれば北方の支那人は雄大迫らざる象で、南方支那人は敏捷そのもの駿馬の風がある。

### 三、北支那人氣質

所謂支那人氣質として傳へらるゝ所は即ち北支那人のそれであつて、その特質とも見るべきは

- 一、利慾の念に強い事
- 二、形式を尙び儀容を飾る事
- 三、面子メンズを偏重する事
- 四、舊弊舊慣を墨守する事
- 五、個人主義に徹底し國家觀念なし
- 六、公共心の缺乏
- 七、祖先崇拜の弊
- 八、運命に安んじ諦めよき事



等である。

孔子は「放於利而行、多怨」と戒めて居るが物質欲、金錢上の欲望に強き執着を有つ事は古來からの北支那人の通有性で、好く言へば節儉質素悪く言へば吝嗇貪慾だが、その多くは過度の節約と不正な金錢慾に陥つて居る傾向がある、俸夫と客とが銅錢一文の相違で數時間の口論の果て警察の厄介になる例は珍らしくない、彼等が政治家となり軍人となるのも自己の經綸を行ひ、或は國家社會の爲めを圖らんとか、或は名譽心の満足の爲めでなくして、唯だ多額の金錢を獲て多大の人生の享樂を味はんが爲めである、支那官吏の俸給が他國のそれに比して不當に低く、小吏下僕の給與が又極めて低廉なものにも理由がある、彼等は官職に就く事によつて部下を搾取し下民を收斂して、俸給の少きを補ひ進んで利益を貪んとする、即ち安い報酬に甘んじ居るも一方に於て公然の秘密とも云ふべき不正の金儲があるからである、頻々たる北京政府内閣の更迭（民

國元年唐紹儀内閣以後今日までに四十七回更迭し一内閣の平均壽命三ヶ月餘、最も短いのは僅かに六日間、要地商埠を狙ふ軍閥の榮枯盛衰、凡てこれ金錢慾に驅られた北支那人の利己的貪婪の結果である、名義上の政治的革命は成功して中華民國とはなつても帝制時代の賣官、買職の弊は舊に増して行はれ、官吏が税金の頭を割り賄賂の收受をなすは公然の事實、下僕が主人の用に上前をばね、尻尾を切るも亦當然の事と見做され、上は大臣たる各部總長より、下は號房の門番に至るまで天下滔々として皆然りである、羅文幹の對奧國借款問題、張弧の官金着服事件、王克敏、李思浩の金フン案問題等、凡て彼等が財政總長在任中の不正事件で汚官職吏に至る所に蔓り、犯職條例はあつても司法官又腐敗して司法權獨立の實がない、そして司法官か他の官吏を彈劾する時にはその依囑を受けた顯官等より彈劾料として賄賂を貰ふのが常例で、曾て段芝貴が名妓翠華を落籍して載振貝子に献上した時之を彈劾した江春霖は岑春煊から彈



効料として多額の金を受けたと云ひ、近くは對佛國政府との金フラン案解決案で李思浩、沈瑞麟を彈劾した北京總檢察廳總檢察官翁敬棠も實は段祺瑞派に反對する吳佩孚側より數千元の彈劾料を取つた結果と傳へらる。

大小官吏の金錢欲から生ずる不義不正の例は枚舉に遑なき程であるが、著者が北京在任中經驗した幾多の事實からその一端を紹介しやう。

民國になつて既に十五年だが首府北京に於てすら一般には猶ほ陰曆を使用し、舊正月、端午節、中秋節、年關の四節季には各官廳の小使、門番は出入の會社、商店等に出頭して酒錢チニチアと稱する祝儀酒手を要求し、國立大學の教授にして給料未拂の爲め生活に窮して淫本の翻譯出版を企つる者あり、外交部、財政部等の比較的給養豊富な役所ですら、その俸給を毎月定期に全額を支給する事は稀で三月遅れ、五月遅れでそれも三割乃至五割の支拂を受くるに過ぎず、内務部、陸軍部、司法部等の直接収入なき部の官吏は十ヶ月、甚だしきは二ヶ年

に亘つて俸給の支拂を受けぬ者がある、茲に於て彼等は何等かの手段によつて之を補ひ、糊口を凌ぐ必要を生ずる、政府部内にあつて自己の取扱ふ情報を或は敵黨派に、或は外國新聞通信記者に密賣して重なる収入として居る者も尠くない、關稅會議、法權會議等に於て列國全權又は關係國公使館が秘密嚴守を約した報告、條例、規約等が何時のまにか、筒拔に支那側から外國に洩れたのも金の欲しい支那官吏が秘密に之を外國人に洩らした結果である、總長の株が五萬元から數十萬元で賣買され、就中機密収入の最も豊富な財政總長、交通總長等の職が最も重要視せられ、直接の収入なき陸海軍、教育、司法各部の總長が伴食大臣扱されるのも全くその就任後の収入本位に因つてである、

總稅務司は英人の手に、各埠海關の稅關長は英、佛、日、伊等の外國人が占據し鹽務署も亦會辦其他の要職に外國人を任命するを餘儀なくされて、國家重要の財政機關の實權が全く外國人の手に掌握され、郵政總局總辦以下郵政局の



管理は又佛國人其他の外人の經營に歸する等の現状は支那人が金錢欲に驅られて自國の財政すら自己の手に處理し得ざるを示す悲惨なる實例である。

北支那人が形式を尙び儀容を飾る事は古來儒教の禮を重んずるに基因してその形式の末に流れ、今は全く捉はれた形式、虚禮化した儀容に流れて了つた、而かも彼等は生活の一切をば何等かの形式化さねば休まない、建築に於ても對稱を主とする左右對翼式や、漸層式の重塔や、反覆式に依る城廓風は至る所に見る如く、莊重儀容、嚴麗の感はその趣味性の全部を語つて居る、中流からの家庭では號房を設け看門的カネメンと稱する門番を置き、來客は一々名刺を通して應接室へと通され、さほどの用事もなきに多數の婢僕を使備して儀容を張り、僅かに余裕ある者は妾を蓄へ、身分財産に應じてその多きを誇り、豪の者になると十人乃至十五人と番號を附せられた夫人を置いて勢力を示す、此の蓄妾制度も昔は家系を絶やさざる爲め、世嗣を獲る目的で設けられた便法であつたが、何

日の間にか形式的因習とはなつたのである。

「經禮三百威儀三千」と云はれた末は「禮過則流」と却つて反省を促がさるゝ程になつたが、今日北支那の人々が初對面の人に對し、宴會の席上等で殊更、威容を整ひ尊大振る風あるも亦此の類で、「支那問題」の著者バートランド・ラッセル氏が「支那人にはその上下階級を論せず皆一種の屈する能はざる尊大の風がある」と評し、「支那生活」を著したウイリヤム・シー・スミス氏が「支那人位自國の風俗、習慣、格言等に狂的自惚を持つ人種は他に比なく、何でも支那のものでなければ價值なきものと過信する」と言ひ居るのも、畢竟古來からの支那文明、その國土の廣大等に自尊心を涵養された北支那人の一特質と見る事が出来る、之に就て閑話休題の感はあるが、或る北支那人の日本人觀か興味ある對照をなして居る故左に紹介しやう、曰く

「日本人は下品の人種である、日本人は各階級を通じて毫も大國民の態度が



ない、高位大官と雖も君子の風に乏しく、上流社會の人士すら悠々遑らざる自ら大人を装ふ氣分を缺いて居る、概して性急であつてオットリした落付がない語氣荒く、表情巧みならず、服装外觀に無頓着で、禮讓を省みる者は稀である」と然らば北支那人は之に反すと見たら好からう、彼の結婚式に中流階級以下の者が殆ど全財産を之に投じ上流人は數千、數萬の巨金を費して見えを張り、(口繪參照)六禮と稱して形式上の要件を重視して、無用の費と繁雜の手續に數百金數十日を費す如き、或は冥婚と稱して未婚にして死せる男子の爲めに同じく未婚の儘黄泉の客となつた同年輩の他家の娘を探し求めて、死人同志の結婚式を擧ぐる如き、全く形式尊重の極弊である、葬儀、喪服の制に就ても徒らに形式に流れてその精神を忘れつゝある、例へば死人を納めた棺を半年も一年も家に留めてその永きを以て家の富有餘裕を誇り、餘計な金を浪費して交通妨害的大行列を市中に練り歩き、(口繪參照)死人に對する悲哀の情を表示する形式

に提はれて泣き男を備ふの類これである、その他國交上、社交上の事凡てに此の式は行はれて居る。

形式維持、儀容尊重の變化とも見るべきもので北支那人特有の「性質」に面子<sup>メンズ</sup>を偏重する弊がある、日本では體面と云ひ面目と稱し、之を重んずる事は古來美風とされて居るが、北支那人の「面子」を顧慮する事は殆ど國民的弊習<sup>ベイツ</sup>となつて居る、官吏には官吏の面子あり、商人には商人の面子があり、下女下男にもそれ相應の面子があり、笑ふべきは乞食に至つてまで面子を口にする、例へば路傍に土下座する乞食が通行の人に數回叩頭しても、一文の惠も與へられぬ時は面子を潰されたと稱する、支那人の面子偏重の弊は多くの小説に巧みに描寫されて居る、聊齋志異にある「嬰寧」の話の如きも甥の家が貧乏だとの理由で貧民を親戚に持つのを恥ぢとして、親類交際<sup>ツキあひ</sup>を絶つたと云ふ面子に拘泥した一例で、娘を妾に出すにしても表面は正式の結婚と見せて面子を立てる、妾と云は



ずして第二夫人、第三夫人と稱せしめる、家の中で何か紛失物があり、それが事實支那人傭人が盗んだと知れて居ても、彼は「泥棒の嫌疑を受けては自分の面子が立たぬ」からと解雇方を要求する、その實主人の知らぬ影では種々な不正を敢てして平氣で居る。支那に二十有六年在住して各階級の支那人との交際から、その性情習慣を觀察したアーサー・スミス氏はその名著「支那人氣質」中に面子の説明に幾多の實例を擧げて居るが、それに就ては同氏の著を参照されん事を紹介するに止めて、茲には支那紙から左の一記事を抜いて説明に代へる。

「滿洲旗人はどんなに貧乏しても苦しい見榮を張る、茲に一つ滑稽な談がある、之は私のボーイから聞いたもので此のボーイは私の處に奉公に来る前、毎朝早く茶館へ往つて茶を飲み半日も茶館で暮すのが常であつた、北京の小さな茶館では茶代が只の二文で若し客自らお茶を携帯して行けば一文で足りる、或

日彼が例の如く茶館に往つて居ると一人の旗人がやつて来て茶を命じた、其旗人はお茶を携帯して居て紙包を開いてその茶を盡く茶碗に入れた、すると茶館のボーイが

「お茶が少くな過ぎやしませんか」

と云ふと、旗人はフ、ンと鼻で笑ひ

「お前なんか何が解るもんか、此茶は西洋の而かもフランスから來た極上の玉露なんだ、斯う三片か四片入れ、ば澤山なんだ」

と云つたので茶館のボーイは黙つてその儘湯を注いだ、私のボーイは之を聽いて變に思ひ、旗人の處へ往つて見ると、茶碗の中には茶の葉が二三片しか浮いてゐない、それも平常飲む香片茶で、注いだ湯には紅味はさて置いて黄色のキの字も色が出ず、殆ど無色の白湯であつた、私のボーイは心中可笑しく思ひ乍らも見ると、その旗人はやがて腰の邊から二文錢を取出し焼餅を一つ買



つてムシャク喰ひ始めた、其の喰ひ方を見るといかにも細かに嚼みしめる様はささ美味しさうで、一つの焼餅を一時間もかゝつて漸く喰ひ終つたかと思ふと今度は人差指で指先に唾をつけ乍らテーブルの上へ字を書き始め、指を嘗めては書いて居た、私のボーイは此の人は何故こんなに勉強するんだらうと思ふ議に思ひながら、一體どんな字を書くのかと注意して看ると始めて其旗人の習字の所以が判つた、それは旗人が焼餅を喰ふ時十分氣をつけて喰つたんだが、餅の上にふりかけてある胡麻がどうしてもテーブルの上にこぼれない譯にはゆかなかつたので、旗人は其のこぼれた胡麻を舌を出しても舐めたく手で掃いて拾つても喰べたかつた、併しそれでは人に看られて恥しく面子がないので字を書くやうに見せて實は唾のついた指先で其胡麻を拾ひ取つては口に入れるのであつた、旗人は暫く斯うして字を書きテーブルの上には胡麻はもう一粒もなくなつた、すると今度は忽ち何か思案するやうな態度で一寸考へては忽ちハツト

氣付くやうな風をしてはテーブルをトーン／＼と叩き始めた、さうして又々指に唾をつけては字を書き始めた、その譯は斯うだ、旗人が先に焼餅を喰つた時幾粒かの胡麻がこぼれてテーブルの板と板の接ぎ目にはさまりいくら指に唾をつけて字を書いて見ても口の中へ拾へないので、わざと物を忘れたかのやうな風をして、又急にハツと氣がついた如くしてはテーブルを叩く、すると板の接ぎ目の間の胡麻がその震動で飛び出る、そこで今度は又字を書く真似をしてそれを口の中へ拾ひ入れるのであつた」云々 ハツトをアマトウキツト 例外

此處まで行けば面子も何もあつたものではなさうだが其處が支那人氣質である、英米人も此の文字の翻譯には苦心した結果その儘「面子」の字を直譯して face とし、面子を立てる事を to save face と熟語さへ作つた、それだけ面子尊重は北支那人の一手販賣である。

要するに人前を飾ると云ふが北支那人の體裁で、僞君子、似而非愛國者の多



い事も面子偏重が支那に生んだ副産物である。此の面子に拘泥する事は個人の上ばかりでなく、國際外交の上にも禍し國家の大局より云へば何でもない詰らぬ問題にこだわつて事件の解決を困難ならしめ、或は却つて國家に不利の結果を來す事が屢々ある。

昨年末北京天津間の交通杜絶に際し天津駐屯日本電信隊の難波軍曹が國民軍の爲め慘殺された事件も日本公使と國民軍第一軍長鹿鐘麟との間に交渉數々に及び殆ど解決の曙光認めらるゝばかりになつたが、支那側では日本軍への陳謝と難波軍曹遺族への吊慰金の單なる名義の問題で不服を唱へ、遂に調印の運びに至らずして國民軍の北京撤退となつて問題は未解決に終つた、之は全く陳謝とか吊慰金とか云ふ、名目が對手方たる支那人の面子を傷くるものとして交渉不調に終つたものである。

古きを好み舊慣を墨守するの風は北支那人の天性となつて居る、米國人が支

那人の極端な保守主義を嘲笑する際によく「支那人とその豚尾<sup>ピグテイル</sup>」と言ふ語を用ゐるが、南支那殊に廣東市に於ては辨髪を着けた支那人を見る事殆どなく、今日東京でちよん髻老人を見受くるの稀なのと同様だが、支那の東京たる北京では今日猶ほ依然として、大切さうに辨髪を下げた舊弊人、それも二十代の青年の間にも之を見る、支那人で日本の文學博士の學位を獲た最初の人で、東亞文化事業委員たる柯劭忞氏も今年七十一歳の老人だが矢張り辨髪の保持者である、自分は今年五月内田康哉伯の北京訪問の時、芳澤公使の同伯歓迎席上、燕尾服やタキシードのハイカラ紳士の間伍して、辨髪に支那帽を被つた此の老人を見て、流石は老大國支那であるとの感を深くした、婦人の纏足もその原因は別として舊慣墨守の好例である。

商業上にも此の弊がある、北支那に於て株式會社の成功せぬ所以は舊來の一時拂込たる合股組織と、官利配當の弊害染み込み、飽まで舊慣に拘泥する彼等



は一度拂込めば再度拂込むの意思なく、如何に大きな會社を創立しても四分の一の拂込あつた後は、第二回以後の拂込を爲さず、一旦缺損を來せば更に株主の拂込を得て企業の繼續を計る等の事なくして空しく倒産するの外なきに因る。

舊慣を墨守し古きを顧みるの常として、北支那の人々は新しき事をも昔よりの古き事に結び付くる癖がある、例へば物理學、光學の科學に關しては何も西洋の學問を採るまでもなく、既に墨子の書に之があると強辯し、民主共和の説に逢へば之は孔子の所謂大同説であると主張し、無政府主義の學説が唱道されば之は二千有餘年の昔、老子が論じたものであると云ふ。

政治的革命を経て民國も十五年を過ぎた今日、猶ほ前清時代は愚か、それ以前數百年、數千年の昔の遺風、習俗が至る所に墨守されて居る。

次に北支那人氣質の一として著しく徹底した個人主義に就て述べやう。

個人主義と言ふてもその解釋は廣狹種々であるが、茲には單に個人主義とは國家及社會の組織は單に個人の爲めに存するものであつて、個人を幸福にする爲めの一手段と解釋して見る。而して此の思想は古く楊朱の爲我主義に端を發して居る、即ち他人の爲めには一毛を抜くを欲せず、天下の物を盡して我に奉じ自己を束縛せんとするも、我亦た之を取らずと云ふ思想で、社會國家を全く考慮しない利己主義である、支那人の眼中國家なしとは内田良平氏が曾て喝破した言であり、水野廣徳氏は「支那人には國家觀念が乏しいと云ふ事をきかされる、支那の歴史と地理より推考すれば、あの廣大な國土に棲んで殆ど國境の觀念を有せず、且つ數千年間犠牲と搾取の營利政治に苦しめられながら、儒敎の盲従と佛敎の宿命とに去勢せられ、毫も國家の恩惠を意識せざる支那人に、或國民のせる如きヒステリックな愛國心の無きは事實である」と評して居る、斯くて彼等は何事にも已れ一人を基礎とし本位として自己の安寧、幸福の爲め



に全力を傾注するが常である、政治上の問題に就ても、表面は黨派的政争と見え、内實は個人的紛争である、例へば政界、軍界の勢力を見ても、外面的には黨派的に或は二分し、或は三分し居る如きも、實はその中心人物たる張作霖、吳佩孚、馮玉祥、孫傳芳と云ふ個人的勢力の衝突、妥協、離合、集散で、それ等の實力者の下にあつて黨派を形成し居るやうに見ゆる千百の徒輩に至つては單に自己の利害、禍福の爲めに結合し、離脱するもので、張作霖に結び、馮玉祥に與し、吳佩孚に頼るも多くは自己一身上の利害得失であつて、張派たり、馮派たり、吳系たりと稱するも天下の公事ではない、故に一朝その利害反する時は忽ちにして、張に對する郭松齡となり、吳に裏切る馮玉祥となり、馮に叛する唐之道とはなり、孫傳芳に對する夏超とはなる。

市井の雜事亦すべて個人主義の現はれである、街路に一人の行倒れがあつて苦しんで居るとする、その周圍には人山を作つて見物はして居るが、一人とし

て此の行路病者をいたはり助けようとする者もなければ、警察へ知らせる者もない、人だかりを見て何事かと馳けつけた巡査が初めてその職業柄、仕様事なしと云ふ風で厄介者扱ひしながら、之を警察署に收容するか病院に擔ぎ込むと云ふ有様で、凡てに「我不關焉」と云つた態度は北支那人の個人主義を遺憾なく發揮して居る。

公共心の缺乏、之は一面から見れば前述した個人主義の徹底した結果とも見られるが、之と稍異なつた意味で公共心の缺乏を語る事實がある、即ち支那の社會組織に原因して居るが、同じ家族の者から成立して居る團體でない、社會公共の團體の利益の爲めに犠牲を拂ふ等の事は決してしない、又例へば彼等の企業は、親戚、同族、同郷者等の出資經營にかゝり、自己を中心とした利益のみを計るに慣れて、公衆の利益を無視する、又家族制度の結果家族に對する扶養の義務を負ふ事重く、公衆から廣く資本を募集して、會社を設立するに當



つても、その重役たるべき者は自己の親戚、同族、同郷者を引きて使用人とし、重役と使用人と結託して利益を計るに専らで、一般株主の利益を犠牲にする弊が多い、之が爲め會社事業は失敗しても同會社の重なる關係者は却つて産を成すと云ふ奇現象さへある、今日でも北支那に於ては外國人の關係經營するもの以外株式組織の會社即ち、有限股分公司なるもの、成功せる例殆どなく又存立するもの極めて稀である、

最後に祖先崇拜の弊だが、祖先を崇拜する事は決して悪い事ではなく寧ろ國民としての美點だが、支那人のそれは極端に偏して美點を通り越して弊となつて居る、南方支那人、就中廣東人の間には此の弊は消滅しつつあるが、北支那には依然祖先崇拜熱がある、之は儒教の教ふる所で孔傳にも「忠孝道著、乃能揚名榮親、故曰終於立身」とあり、生前父母に對する恭順を尙び、その死後は又父祖の祀を絶やさざるを貴しとする爲め、子孫(男子)を儲くる事に重きを

を置き、その結果は早婚となり、嗣子を獲得する爲めの蓄妾となり、更に男子の後継者なき場合の養子採用の制となる、故に一般北支那の男子は自己の爲めに結婚するに非ずして家の爲めに妻を娶る、第二夫人、第三夫人を娶るに至つて始めて自己の爲めの結婚をする風がある、此の早婚と蓄妾制度と養子縁組の制は大家族主義を招致し、大家族主義は過剰人口の基となり、過剰人口の増殖は生活程度の低下となり、今や支那四億餘萬の民の大多數は教育も生活の機會も満足に得られずして醉生夢死の生を送りつゝ蠢動してゐる。

祖先崇拜が如何に支那人の生活を支配するかに就てエーツ氏の「祖先崇拜論」から一節を摘譯して參考にする。

「支那人の祖先崇拜は彼等の宗教の基礎であり、又彼等の日常生活、行動の多くは之に基いて居る、社會的習慣、裁判の判決、國務總理の任命等凡て祖先崇拜の影響を受けざるはない、例へば或る男が重罪を犯した場合でも、彼が長



男であるか又は獨り子で、その父か母か又は兩親が最近死亡したと云ふ時にはその罪を減じて父母の供養をさせる」と、彼等が先祖の墳墓に廣大な土地を犠牲にして祭祀に努め、その墳墓の地を大切にすることは周知の事實である、今日財政窮乏を叫ぶ北京政府が公に祖先崇拜に毎年消費する金額は優に五百萬元に達すと云ふ。

運命に安んじ諦めよき事は佛教の業因果果、儒教の天の信仰を根柢とする思想に基いて居るが、一つは古來より洪水、饑饉、疫病その他の天爲の災害に苦しめられた結果、天災には抗すべからずとの宿命觀から來たもので、非常な不幸に陥つても彼等は「沒法子」(「仕方がない」の一語で諦めて了ふ、盜賊に遭つても「沒法子」、強判的に軍隊に拉致されても「沒法子」、それこそ銃殺されて了つても「沒法子」である、彼の「視死若歸」と云ひ「從容就死」と云ふは支那人が宿命觀から、いざとなれば死も懼れぬ様を形容したもので、強盜罪とか或



は脱走、或は通敵等の罪で犯人や兵士が北京市中を引廻され、郊外の天橋で死刑に處せらる時でも、又引廻されて市街を歩む様を見ても今殺さるゝ者とは見えぬ程、極めて平然たる有様で、中には眼かくしもされず泰然として殺されて行く處は外國人殊に歐米人には異様の感じを與へる。

彼等が月下冰人の故事によつて婚姻は皆な前定ありと信じ、親の定むる結婚に甚だしい不満を感じないものが爲めである、一言にして云へば彼等は消極的で抵抗的でない、即ち境遇に満足して、自然に打勝つとは現状を打破すると云ふ勇氣に缺けて居る、之は南支那人と大に異なつて居る點である、尤も五千年の文明を有し乍ら、その後長足の進歩もせず、大なる發明もなく、科學的に全く死せる歴史を續けて來たのも此の運命に安んじ、諦めよき氣質が禍したものである。



#### 四、南北支那人の共通點

以上述べた所の中には南北支那人の相違と判然區別し得ない點もないではなかつたが、略ぼその異なる性質に就いて述べ得たと思ふ、尙ほ兩者の共同的氣質國民性とも云ふべきものを求むれば

- 一、迷信深き事
- 二、妥協性に富む事
- 三、辭令に巧みに交際上手な事
- 四、自己主張
- 五、平和愛好の念
- 六、氣長で辛抱強い事
- 七、残忍性に富む事

#### 八、不潔な事

#### 九、猜疑心深き事

十、賭博心強く享樂を事とする等である。

何處の國民とても、迷信のないものはなく科學的智識の普及した米國人の間にすら、十三の數を嫌ひ、金曜日を忌む結果、十三日と金曜日が重なる時はその日一日事務所にも出ぬと云ふ擔ぎ屋があり、病院等の室番號にも特に十三號室を除いて置く位だが、支那人の迷信癖は痼疾となつて居て何事にも因縁を附け御弊を擔ぎたがる、そしてそし由來する所は古く且つ深い、彼等はその文化が幼稚な時代からして(一)勸善懲惡の天帝を信じ、(二)自然界の不思議を信じ之を崇拜し、(三)人の死後に存すると云ふ鬼神を迷信した、而して後には仙人を信じ陰陽五行の説を信じ、天文と稱する星占學による禍福吉凶を極度に信ず



るに至つた、今日猶ほ周易占斷は支那人生活の一の重要な部分をなして居ると云ふも過言ではない、日蝕、月蝕を以て天狗が之を呑む爲めだと信じたり、發狂や病氣を持つて悪魔に憑かれた結果と迷信し、結婚には結婚の迷信あり、葬儀には葬儀の迷信あり、旅行、移轉、開業、日常座臥凡て迷信の伴はぬはない又文字の國だけに文字による迷信も尠くない、予が居住した北京東單三條胡同の住宅は居室で圍まれた四角な庭の中央に一本の立木があつて、夏は此の木繁茂して自然の天棚をなす程大きなものであるが、支那人は此の木を倒さざる限り、此の家に住む者は一生貧乏すると予に屢々忠告した、その謂れを聞けば四角即ち口の中に木あるは困の字であると云ふ、之が爲め此の住宅は由來外國人は居住するが支那人は居住せぬとの事であつた、先の帝制時代を一般に前清と言ひならば事實より推して、之は必ず後清のある前兆だと迷信する、教育ある者にして尙ほ斯の如しである。

廣東市を貫流する珠江上に水上生活をする者十萬と稱し、陸上の市民からは特殊階級視せられて親子孫と代々舢舨生活をして居るが、彼等は殆ど水泳も知らず、河中に落ちて溺れんとする者あるも救助しやうとはしない、之れは溺れる者を救へば河神の崇りを受けて救つた者が溺死すると云ふ迷信があるからである、債權者が貸金が返還されなかつたとて失望と怨恨の餘り、債務者の家の前で自殺して債務者の不正を呪ふのも迷信から來た一種の復讐で、可成り頻繁に行はるゝ手段である、併し奇妙な事は敍上の如く迷信深い支那人が、宗教そのものには餘り熱心でないことである、「支那文明」の著者ハーバード・エー・ヂヤイルス氏も「宗教と迷信」と題する章の冒頭に「支那人は非常に迷信深いが強い宗教的信念ある國民ではない」と斷言し、ダイヤ・ポール氏も皮相の觀察者には支那人は非常に宗教的人種の様に見えるが、精細に考察すると、彼等の禮拜には多量の形式主義があり、彼等は極めて迷信的で偶像は全國に充滿して



居る」と辛辣な批評を下して居る。

支那人は南北兩人種共に妥協性に富んで居る、彼等は何事を決するにも常に最後の餘地を残して置く、政治家が失脚する際に於ても、軍人が武運拙くして敗れた時でも、必ず最後の避難地があり、豫て萬一の場合を期して準備し置いた、最後の餘地に其身を潜めて再起を許り、敵黨も敵軍も亦對手を徹底的に膺懲する事をしない、之が彼等の通有性である、支那に内亂の絶えざるも此の不徹底な妥協が禍して居る、奉天派が直隸派に勝つても、それは決して決定的勝利でなく、直隸派には猶ほ再起の餘地は残される、奉天軍の國民軍追討も張之江、鹿鐘麟をして綏遠、甘肅に踏止まるだけの餘地は與へられた、敵をして再び起つ能はざらしむるまでに徹底的に之を撃つ事もしなければ、敵も亦そんな危険に陥る前に妥協的態度に出て最後の安全を計る、支那の戦争では敵に對し常に逃げ道を與へて、敵をして窮鼠たらしめざる兵法が必要で、支那の戦事に

筒井順慶的日和見態度の軍領の多い事も此の妥協性の發露である、併し之は獨り戦事には限らず、大小の談判、黨派的勢力争、國際的交渉の要領も皆その通りで、世は民國となつても前清室優待の道を講じ、三民主義を高唱する孫文と軍國の巨頭張作霖が提携し、和平統一論者と武力統一論者が握手するも之が爲め、今日の敵が明日の味方と、猫の眼の如く變轉極まりなき支那政局の變動も此の妥協的國民性の結果である。

支那人が辭令に巧みな事は日本人などの遠く足元にも及ばぬ所で、流石は上下五千年の古き文明國として古來より、外交、社交の術習練された事が首肯される、蘇秦、張儀の流儀は今も傳統され、雄辯術となり、宴會外交となり、國際場裡の樽俎折衝とはなつたもので、現時の支那青年が口述辯論に巧みなるも亦此の歴史的賜物である、歐洲列國の老練外交家に比して、年齢に於て親と子程の差違があり、經驗に於て老妓と雛妓の懸隔ある支那の外交官、顧維鈞、王



正廷、王寵惠、伍朝樞等が或は巴里講和會議に、或は華盛頓會議に、或は關稅會議に列國の外交家を巧妙に操縦して、國際外交上に着々成功しつゝあるのも之れで、その圓轉滑脱に及ぶなき交際振り、殊にその先天的國民性とも云ふべき外國語の巧速なる習得による、社交美は天下獨歩で、南北支那人の口舌の妙は婦人、小兒の間にも現はれて居る、彼等が宣傳術に優れたのも之が爲めで、殆ど實力によらずして外交上其他に成果を收め居るも之に因る。國內の戰爭に於ても彼等は往々「聲討」なる事を行ふ、武力的肉彈戰によつて敵を討つに非ずして、聲により即ち宣傳、謠言によつて敵を屏息せしむる方法である、國民黨が比較的強力ならざる實力を以て常に敵を惱ますのも「聲討」の力である。

辭令に巧みなだけ支那人はその言ふ所に理なき時も、強いて理屈を付けて聲音により、態度によつて對手を説服する事にも妙を得て居る、彼等の議論には論理は通用せぬ場合が多い、正しい理屈は往々にして彼等の詭辯に壓倒されて

了ふ、實例を擧ぐれば、日本の某大會社が支那政府に貸附けた金の催促をした時の對手方の政府代表者の答が振つてる、曰く「貴會社は大資本を擁し大金持であるから、僅かな借金は支拂はずとも差支へないではないか」と。又之は手が關係した會社から京漢鐵路局に對する債權で延滞三ヶ月餘に及んで居る料金を、屢々催促した揚句、同局會計課長の返答に曰く「貴社への債務は本局の財政上の都合で支拂はぬ事にしたから其の積りで」と、凡てが此の式である。

米國人が事毎に世界第一を誇る自負心を持つて居る事は世界に定評あるが、支那人も亦米國人に劣らぬ自己主張の國民である、唯だ異なる所は米國人のお國自慢は現在に關し、支那人のそれは過去に關す、今年十月末東京に開かれた太平洋學術會議の席上、各國代表者の演說中、支那代平泰沅氏のなした「民國は過去三千年來文明の進展に努め、學術的發見の機會と研究材料眞に豊富なものがある」との演說の如きは最近の一例で、彼等は古來謙讓の徳を教へられつ



、尊大と自慢の風を養はれた、それには過去の古い文明と、國土の大が禍した明治二十七八年の日清戦争により漸く小國侮るべからざる事を知り、同時に歐洲列國に對する危惧の念を生じて、自國の弱劣に目覺め、自負の念は減じては來たもの、<sup>○</sup>中華民國と稱し「東亞の大國」たる信念は依然たるものがある、殊に歐洲大戰への參加後は「國家は弱くも國民は強し」との觀念を生じ、列國就中、英、佛、日、伊等に對する態度は再び硬化し、自己主張の念は更に強く育くまれて來た、彼の五卅事件の際國民軍幹部が對英宣戰を主張し、北京の各團體代表六十餘名が、政府に對して即時對英宣戰を布告せん事を諸願して、支那四億の民衆を以て英國と戰はゞ勝敗は立所に決すべしと豪語した如きは、支那國民の自己主張の如何に強きかを證して餘りあらう。

米國では「兵隊と囚人だけが行列して歩く」と云ふて、兵士たる者を卑侮する風があるが、支那にも亦「好鐵不打釘、好人不當兵」との俗諺があつて良き人間は兵士とはならぬ事を表示し、支那人自身口を開けば「吾人は平和を愛好する國民である」と絶叫してやまない。而して崇文卑武の思想は古くからあつて、歴代文官は武官の上にあつた、例外的には清朝の時代に武官の位が文官よりも高かつた事もあつたが、それは當時餘りに卑武の風があつた爲め、せめて官位を文官の上にしてその權衡を保たせたものである、現時内亂四百餘州に絶えず、軍閥の横暴、兵士の跋扈跳梁を眼の當り目撃しては、支那人は平和を愛好する人種とは受け取り難いが、之も一時的變態とも見るべく、支那人一流の論法で行けば「吾人は眞に平和を欲し之を愛好する、兵亂絶えざるは國民が戰を好むが爲めでなくて、無智、無頼の徒が兵たる爲めで、之が故に國民は益々以て平和を要望し、兵を惡み卑しむものである」とも云ひ得やう、歴史的に觀察しても尙又卑武の風が多く、南北朝魏の初、府兵（今の近衛兵）を募集するにさへ、特種部落や賤民から取り、唐代などにも兵は刑と擇ばすと云ふ觀念が



あつて、一族の中より兵を出す事はその一族の不名譽とされ、或る時は逃亡を防ぐ爲め、兵士に入墨を施した事もあつた、近時になつても軍隊は一種の窮民收容所と見做され、衣食に窮した者が募集に應じて兵卒となると云ふ風があるので、實質的には無論輕侮の念を以て見られて居る、又土匪が改編されては兵士となり、土匪の頭目は化して軍長となり師長となる（廣東の李福林、徐樹榮山東の孫美蓉、河南の樊鍾秀の如き）有様である、名は國家の軍隊たる如きも實は一地方軍閥、頭目の私兵であるから、半兵半匪と罵られても止むを得ないが、最近、外國に對する愛國運動の勃興と、所謂排外思想の興起とは、兵力によらざれば外侮を禦ぎ得すと云ふ一種の覺悟と、軍閥將領の自覺とその部下に對する待遇給養の改善等は一般人民の兵士に對する輕侮の念を薄らかした事實がある。

併し支那國民の根底には常に平和的思想が流れて居た證左がある、古くは周

末に於ける墨子の非戰論、宋程の平和主義、管仲の法治主義、清朝に至つては公羊學者の太平大同說、近くは廢督裁兵論、和平統一の主張等これである、唯だ過去の事實及び支那の現状が之に反する如き感あるは、社會制度の不備、國家機關の缺陷が禍して國民の理想たり、希望たる平和主義が完全に行はれなかつたのに因る、故に何の時代に於ける内亂、戦争の後を見ても、積極的好戰の思想は毫もなく、時の政弊が積つて堪へ切れなくなつた場合に限られて居る、エフ・ジー・カーペンター氏が「支那人は農業的な平和を愛する國民」と評し、バートランド・ラッセル氏が「支那人の品性中、平和的氣質を以て最も貴ぶべし」と云ひ、アーサー・スミス氏が「支那人氣質」中特に平和に對する熱望と喧嘩嫌ひを擧げ、チャールズ・ウェルナー氏が「支那人が平和的で法治の國民だと云ふ事は、支那人の争闘、暴動等を見ると甚だ矛盾したやうだが眞理である否な世界で最も平和的な國民である」と斷言して居る一致的意見に見ても、知



れる。唯だ之と共に文弱の弊を伴ふ事は自然免れ難い所である。

支那人の氣長で辛抱強い事は有名なもので、之は印度の僧で支那に歸化し禪宗の開基となつた達磨の面壁九年、張公藝の九世同居、萬里の長城の建築等凡て之が實證で、今は廢されたが科擧の制に官吏たるべく、一生涯を費して悔まなかつたのも彼等の辛抱強さを示す好例であらう。日本人は大正十三年七月一日米國の排日法制定に憤慨して、全國的に蹶起したが、モウその翌年は忘れ去つて七月一日の何たるかも知らぬ有様だが、辛抱強い支那人は日本の對支廿一條要求の調印日たる五月九日、山東問題の紀念日たる五月四日を國恥日と定め毎年毎年、官憲の壓迫に抗しつゝ、その運動を繼續して、日本外務省の心膽を寒からしめて居る。

氣の長い辛抱心は忍耐心の發達となり、同時に強者より受くる壓迫に對し隱忍自重しつゝ、無抵抗に之を回避する智慧も發達した、暴虐の君主に對し、專

横な當局に對して採り來つた支那國民の態度は之れである、此の點は明かに支那人の美點で、之は支那研究の歐米人が又一致して認めて居る所である、廣東人を主として觀察したダイヤー・ポール氏は「支那人の辛抱強い、堅忍不屈の精神と勤勉な事は賞讃の外で、どんなに詰らぬ仕事でも、又どんなに困難な仕事にも、倦まず撓まず、堪え忍んでやつて行く美點を持つて居る」と賞し、支那人の智識階級を主として見た、バートランド・ラッセル氏は「支那人の性質中最も歐洲人をして驚嘆せしむるものは忍耐心である」と述べ、北支那人を中心に考察したモリス・クローラン氏は「支那人には忍耐の心強く、何事にも容易に熱し難き代りに、一度び熱する時は容易に冷めず、飽くまで根強くその目的を貫徹せんとする執着心がある」と云つて居る。

支那人の殘忍性は先天的で殺人方法の慘酷な事などは見る者をして眞に身の毛をよだつしむる、民國十二年から十三年にかけて、廣東市中が國民黨軍と陳



燭明軍、又粵軍と客軍の争亂の巷となつた當時の市中の血なまぐさ、目貫の場所  
 所で銃殺、斬殺が公然と行はれ、その屍體は血まみれの儘數日となく、街路に  
 洒され、中には犬に四肢を噛み取られた無残な死體となつても市民は之を目撃  
 して案外に平然として居る、民國十四年の末、張作霖に裏切つた郭松齡夫妻の  
 屍體に對する奉天軍の慘酷な仕末、民國十五年直魯聯軍の北京占領後の天橋刑  
 場に於ける死刑囚の生首の陳列、或は河南土匪軍が人質に對する酷刑等は目の  
 當り見た者でなければ想像も出來ぬ殘虐さである、曾て廣東から梧州に行く途  
 中土匪に捕へられた某富豪に對し、土匪は五萬元の身代金を要求し、其富豪の  
 家族は餘りに法外の贖金に之を値切る交渉をなし、四萬元では、三萬元ではと  
 散々に交渉した結果、遂に二萬元で話が纏まり現金を持つて往つた時、金はそ  
 の儘土匪に取上げられて渡されたものは、指を切られ、頭髮を焼かれ、身體に  
 は蜂の巢の如く銃創を受けた富豪の屍體であつた、之は交渉の長引く間に土匪

の頭目の方で復讐的に人質を斃り殺しにしたのであつた、軍隊で土匪を捕へた  
 時も之に勝るとも劣らぬ方法で慘殺する、又強盜犯人等が逮捕されると警察で  
 は人民への見せしめの爲め、その犯人を犯罪の現場即ち被害者の家の前に連行  
 して之を銃殺し、時には五寸釘などを打つてその死體を一兩日、市中に洒す  
 事は珍らしくない。

香具師が五六歳の少年少女を誘拐して之を秘密に監禁し、辛くも身體の這入  
 るだけの樽を作つてその中に一人宛、此等の少年少女を押し込め、僅かに手足  
 と首だけを樽の外に出る様にして食物を與へて、何年若くは十數年と養つて後  
 人爲的不具者を作り之を自然的な不具者の如く見せて觀世物にすると云ふ殘酷な  
 方法は、現時の支那にも猶ほ行はれて居る、昔に遡れば此の種の殘忍な仕業は  
 益々多く愈々非道かつたと思はれる事實は、水滸傳を讀み、煬帝艷史を繙き、  
 吳越春秋等を讀めば知れる、然らば支那人は何故斯くも殘忍性を帯びて居るか



と云ふと、解釋は容易でないが之は長い間の習慣に彼等が死とか殺人、或は拷問等の類發に末神經の刺戟が鈍くなり、無神經無感覺となつたのではないかと思はれる、次に述べる支那人特有の不潔と云ふ性質も此の無神經、無頓着に歸する事が出来る。

不潔な事も亦支那人の通有性と見られて居る、之は多數下級民の衛生思想の缺乏にも因るが、一般に支那人は清潔と云ふ事に無頓着である、疫病の多きも之が爲めで、料理法の發達して居る割合にその食物が外國人に賞美されないのも食器其他に對する衛生的方法が無い爲めである、汚ないと云ふ念を去らねば支那人の間にあつて生活は出來ぬとは外國人の定評である、一つは軍人の跋扈とも見られるが、予は天津、北京間の一等車内で下士官、又は中少尉の軍服着けた者が上衣を抜いで内外人環視の前に、平氣として蚤取りか虱取りするのを幾度か實見した。南京虫に至る所繁殖するのも彼等の不潔を雄辯に證據立て、

居る、上流の人士が絨氈の敷かれた床の上に唾を吐き、處構はず手鼻をかみ、大都會の道路に小便は愚か、小さな黄金塚が築かれてあるには驚く、三四年前韶州に旅行した時の經驗であるが、河上に浮べられた船の便所から大便を終つて外に出たら、其處から三間と離れない下流で同じ河の水で野菜を洗つて居るのを見て、その日一日飯が咽喉に通らなかつた、日本人は余りに潔癖であると云はるゝが支那人は又餘りに不潔癖である。

支那人との交渉會見に於て不愉快を感じるのは彼等が他人に對する猜疑の念の強い事である、當方では誠意を披瀝して述べても先方では容易に之を信用しないばかりか、却つて此方が餘りに卒直に明白に語り行く時はその眞意を曲解される傾きがある、殊に初對面の場合に於てさうである、予が南は廣東に於て北は北京其他に於て接した孫文、蔣介石、陳炯明、段祺瑞、張作霖、馮玉祥、黎元洪其他の多くの要人との會見に於て、恐らく孫中山先生等一二の人を除く



外、此の感を深くした、唯だ彼等も二度と合ひ三度と接するに従ひ漸くその猜疑の念を去り行くも容易くその心は許さない、政治家として萬人の上に立ち、軍領として萬騎を指揮する位地になつても、彼等は心からその部下を信頼し得ない場合が多い、古來歴史に幾多の例證がある、越王勾踐が戦敗れて吳王夫差に和を請ふ際自ら吳王の臣となり妻をその妾に納れて降つたのも、通常では吳王の猜疑を免れぬ爲めに採つた非常手段で、伍子胥が之を諫めたのは越王の反間苦肉の策を透察したからであつた、陳爛明が孫文に裏切り、郭松齡が張作霖に叛し、馮玉祥が吳佩孚に離反したのも、支那の主従の關係が如何に信頼し難きを示すものが、馮玉祥が今日西北國民軍總司令の重職にあつてその部下として信任する者は、悉く彼が陝西の第十六混成旅々長當時よりの部下を引立て、軍長、師長、旅長としたものだけで、張之江、鹿鐘麟、宋哲元皆元は馮旅長の下に營長たり、連長たりしものである、文官たる外交處長の要職には又彼の

妻の從兄に當る唐悅良を据えた、而して如何に才能あり枝倆ある者でも新參の軍人、外様の士には虚名虚位を與へて利用はするが、決して實力を與へず、兵力を持たせない、兵站總監高震龍參謀長劉祺に對する如き然りである、之は人並優れて猜疑心の深い馮玉祥ばかりではない、東三省王張作霖とても然りである、奉天軍の最も精銳なる軍隊は自己の長子たる張學良に指揮を委ね、之に次では同族たる張宗昌、張作相に實力を持たせ、楊宇霆はその才能奉天軍中に群を抜いて居るがその才能が禍してか、參謀長の名譽職は與へられて居るが、部下としての兵は持たされて居ない。段祺瑞が吳光新を最も信頼するも妹婿たる關係あればこそで、支那人が常に一族を引立て一門を集むるのも一は他人を猜疑するに因る、馮玉祥の國民軍が常に日本人と云へば疑の眼を以て見たのも、日本の滿洲經營より延ては張作霖援助に猜疑の心を持つたからで、梁士詒が民國十年奉天派と結んで國務總理の職に就いた時、吳佩孚が猛烈に梁に反對した



のも實は、梁士詒内閣と日本政府との間に山東鐵道直接交渉開始され、その結果は梁士詒の背後にある奉天派張作霖の勢力を増すものとの猜疑に基因して居たと云ふ。

最後に支那の特質の一として挙げたはその賭博癖で、彼等は南北を通じて生れ乍らの賭博人種とも云へる。賭博の種類としては麻雀、番攤、闍姓、白鴿票、陞官圖、牌九、花會、搖攤、山票、趕綿羊等がある、尙ほ之を細別すれば幾十種にも分れるが大別すれば以上の十種に分る。就中麻雀は近年、歐米の社交界を風靡し、日本へも流行し來たが、支那ではそれこそ津々浦々山の奥までも麻雀の行はれざる所なく、貧富貴賤、老若男女の別なく之を弄び、事實上の國民戯となつて居るが、餘りの興味深さに之に淫する者多く、又貴重時間を費す事多き故、一部識者の間には麻雀亡國論さへ唱へられて居るがその聲は低い、而して日本人は之を單に興味本位の時間潰しの遊戯として取扱つて居るが

支那人は阿堵物を賭けずには決して此のゲームをやらぬ、無論法律では之を禁止し、大清刑律にも「凡そ財物を賭博する者は皆杖八十」云々の規定もあり、現行法規でも處罰は規定されてあるが、法律は空文に等しく、上は大總統、國務總理から下は俵夫、苦力に至るまで、その賭金の額にこそ懸隔あれ、公然金錢を賭けて輸贏を争ふ事は同じで、東三省王から近くは臨時大總統として北京に乗込むと云ふ、張作霖が麻雀と阿片吸烟を日課の一とし、廣東軍の軍長たりし蔣光亮及その夫人妾等が香港に於て、連日連夜一卓數萬元を賭して麻雀の勝負をした事等は餘りに有名で、偶々法網にかゝる者あれば、それは市中人家の軒下などで十文、二十文の銅錢を賭けて遊ぶ底下人、苦力の徒である。

米國は太平洋岸シアトル、ポートルランド、桑港等の大都市で支那人が巨萬の富を成すのも多くは外國人對手の賭博場で、在米日本人中にも汗水垂らして貯めて財産を、支那賭博の爲めに蕩盡して了ふ者が尠くない、況んや本國の支那



人が賭博の爲め家を失ひ、産を投じ果てはその妻を賣り、或は之を抵當として一六勝負に耽る例は餘りに多い、今は葡萄牙領だが澳門市が全市を擧げて賭博を以て生活の基本とし、廣東市が番攤其他の雜賭を公許して、一日四五萬元に達する賭博税を以て軍費に充てた等の事實は、支那人が如何に賭博熱盛んなるかを立證するに足るであらう、そして享樂の世界に酒と女が附きものである如くに、支那では賭博と阿片とは影の形に添ふ如く、賭博場の一隅には大概吸烟室が附屬してある、日本では呑む、打つ、買ふの三拍子揃つた者は獄道者として居るが、支那では道樂者にはモウ一つ吸ふ(阿片を)と云ふ資格が必要だ。

阿片も古く遡つて周の時代(西曆紀元前九百七十年頃)既に緬甸から輸入され、珍藥として重用されたが、之が吸烟される様になつたのは清の康熙元年頃で、禁烟令が初めて發布されたのは世宗の雍正七年である、此の頃は阿片の輸入額も一ケ年二百箱位であつたが、その後阿片輸入は英國商人の手より更に東

印度商會の手に移り、遂には無制限に輸入されて、その害毒愈々蔓延し來たので、兩廣總督林則徐の禁令、現物二萬餘函の燒棄となり、阿片戦争を惹起した事は歴史に明であるが、更に近代に至つて阿片吸烟は國際上の大問題となり、之が爲め特別阿片會議まで開催さるゝに至り、支那政府も幾度か禁烟令を發布はして居るが、世間ごまかしの空令で毫も實行されず、煙毒の蔓延は益々旺んである。曩には廣東市に禁烟督辦署を設けて、表面阿片吸烟を取締るとの名の下に、内實は之が吸烟を獎勵して收入の増加を計つたが、今は又北京政府が禁烟處を設立し、阿片十匁に三十仙、吸飲器一個に付毎月十元の印紙税を課して禁壓に努めて居ると云ふが、實は廣東政府と同じく財源を得る爲めの窮策と見られて居る、それ程支那人の吸烟は痼疾となつて居る。

「中國風土人民事物記」に據れば二十年前までは支那婦人の吸烟者は少かつたが、昨今では全國婦人の十分の一は此の害毒に罹つて居ると、殊に近年阿片中



毒者と阿片自殺者の増加は禁烟論者をして、全國禁烟同盟會の組織を促成し、全國的に此の運動は起されて「阿片の吸煙はやがて民族を蝕み、國家を滅し、更にその蔓延は人類を破滅に陥るも」のとの宣傳まで行はれ居るが、他方には支那人より阿片を取去る事は即ち支那人を去勢して、却つて滅亡に導くものと論ずる者もあり、英國人の中には香港の辯護士ブリヤートン氏の如く「阿片吸煙は決して有害ならず、その程度は飲茶と異ならず、所謂人道主義者の英國攻撃は當らず」などと、自國の辯護をなす者もあるが事實はさうでない、殊にその害毒が酒、煙草の比でなく、又之が支那人の變態的享樂の一たる事は否むべくもない。

更に支那人の享樂生活の中心をなすものに性的欲望がある、此の欲望享樂には實に支那五千有餘載の文化文明が唯だ一點に集注された觀がある、サンガー氏はその著賣淫史中に「支那人は世界に於て最も淫蕩的國民の一つである」と

評し、彼等の性欲の強烈な事は既に世界的定評があり、性欲増進に關する研究は遠い昔から行はれて居る、何が故に又何を目的として彼等が高官、顯職を望み、富豪たらんと欲するかと云ふに、恐らく百人中九十九人まではその官職を利用して金を得、その金を以て人生の享樂に耽らんが爲めと云ひ得やう、支那四大奇書の一にして古今第一の淫書と稱せらるゝ金瓶梅は極端な我慾と性的欲望享樂に耽る、支那人根性のその社會状態の裏面を遺憾なく發揮して居る。

支那料理と云つても各省によりその材料、調理法に相異はあるが、總てを通じて材料豊富で、味濃厚、消化善く、滋養に富む事は有名だが、その調理が主として精力の増進と性欲助長に資する様、行はれて居る事は一般には知られて居ない、燕窩と云ひ、岩城鮑と云ひ、密饒果物、海參、蛇料理と云ひ、凡て此の目的に添ふ爲めの材料で、支那人が特に賞美する所である。

廣東に江孔殷と云ふ有力な富豪がある、彼は同市の對岸河南ほんなんの自邸に、技倆



優秀な数名の料理人を常備にして、自慢の家庭料理（と云ふても數十人の大宴会に適する）を客に饗應するが、特にその蛇料理は天下の珍とされ、數年前我が宮内省大膳職より支那料理實地研究視察の爲め派遣された某氏も江氏の邸に出張された程である、彼は今年六十歳の老人だが、自家獨特の蛇料理によつて精力を養ひ、元氣頗る旺盛、一方金の有るにまかせて十四人の妾を蓄へ、それ等の妾には出來得る限り粗食させて、己れは凡ゆる營養物の吸収によつて性的享樂の飽滿に心を専らにして居る、彼は又阿片の常用者である、これ阿片吸煙は常に快眠を貪り得るばかりでなく、性的刺戟に偉功ある故である、廣東名物として知らるゝ三蛇酒、即ち三種の毒蛇の膽汁を入れて製した酒が、彼等の間に愛用さるゝも同じ目的の爲めである。

支那婦人（滿洲、客家、廣東の水上生活の婦人を除く）特有の弊習である纏足も、支那男子の性的欲望満足の爲めの犠牲である、最初は金蓮步とか云ふて

美人の特質としたが、後には閨訓の具として獎勵された、之は明かに婦人を男子性欲の玩弄物視し、その歩行を困難ならしめて獨占し、その楚々たる歩み、そよ吹く風にも堪ぬ風情に男子の性欲を挑つたものである、ハグエロツク・エリス氏も「性の心理研究」中にマチノン博士の著より「支那婦人の美はその足にある、纏足せぬは女の恥ぢと詩人は歌つたが、夫に取つて妻の足は顔よりも興味をそゝる、支那婦人は男に足を見らるゝ事を、歐米の婦人が胸を見らるゝと同様に嫌ふ」との一節を引用し、「中華婦人纏足攷」の著者賈仲氏も纏足の發生も楚宮の腰、漢宮の髻と同じく男子の性的欲求の玩具としてあると説明して居る。

尙ほ支那人の性的享樂を重視する半面とも見るべきは今日、各地の新聞に掲載さるゝ強精補腎の藥の廣告の多い事である、補腎茯苓丸と云ひ、更生丸と云ひ、或は和石還元丹と云ひ、陰陽二鍊丹と云ひ、凡てこれ陰陽強精の秘藥で



上中流の殆ど凡ての支那人は此等の春藥の愛用者である、之と關連して支那人の性的享樂の盛んなるを語るものに道教がある、即ち道德經の思想は源を原始社會の生殖器崇拜に發し、その末は墮落して卑穢邪術と見るべき房中術や神仙道の類となつたもので、その眞髓は矢張り陰陽哲學にある、此の關係よりして支那には昔より陰陽術の研究發達し、淫書の刊行尠くない古くは唐代の「天地陰陽交歡大樂賦」迷樓記、游仙窟（唐の張文成の選だがその後支那にはその版を絶ち、日本には嵯峨天皇の書卷の中に發見されたと傳へらる）素女經、玉房秘訣、玉房指要、洞元子等の殆ど陰陽術の教科書とも云ふべきものより、清朝以後には金瓶梅、肉蒲團（一名覺後禪、或は耶蒲緣）、如意君傳、野叟曝言、濃情快史、燈花記、株林野史、痴婆子、牡丹緣、玉嬌李等があり、近くは北京文學教授張競生が編纂した性史（此の書は編者が新進學者として當代の人気者だけに、男女學生間に於ける賣行素晴らしく、流石無頓着の北京警察廳も風教に害あ

りとして售賣を禁止したが、市中の書店では半ば公然と販賣されて居る）等、純然たる淫書が支那各地の書店で賣り販かれて居る、又日々の新聞紙上、或は雜誌等にも日本は勿論、比較的此の種の取締に寛大なる歐米諸國にても傷風敗俗社會を潰毒するものとして當然掲載を禁止さるべき程度の淫猥極まる記事が、官憲の檢閲、干渉なしに掲げられて居る、

斯の如くして支那人は淫書により公然淫欲發達の智識を養ふと共に、強精を主要な目的とする食物と、春藥と阿片により性的欲求の充念に努めて居る、國內各地に兵燹絶えず、混亂打續くも北京、天津、上海、漢口、廣東、奉天等の歡樂の巷には夜となく晝となく絃歌胡弓の音喧しく、砲聲爆音は外吹く風と聽き流して大層高樓の間には雜沓と繁盛を極め、淫樂と逸遊の氣分に充ちて居る。



## 結 論

以上に於て南北支那人の特質とも云ふべきものに就て大方述べ盡したが、今その叙述の後を顧みて見ると、北方支那人氣質に就て短所を見るに酷にして長所を見るに寛なりしと同時に南方支那人の觀察に於ては短所を稍見逃した感じがある、それ著者の支那研究が多くの人とその行方を異にして、先づ米國にあつて支那問題を机上に攻究し、次で南方支那の中心地廣東に渡つて、北支那人とは根本的に氣質の相違する南方人に接し、或は孫中山先生の聲咳に接し、或は廖仲愷、伍朝樞、吳鐵城、孫科の諸氏と親近したる結果、所謂南方人の美點長所のみを印象づけられ、更に數年の後、北方支那人となりし爲め、動もすれば廣東人より受けた好印象が先入主となつて北支那人に對する不知不識の間の偏見となつたものに非ざるやを、今に於て懸念するものである、無論自己の

良心の命ずる所公平な立場に於て南北支那人の特質を比較觀察した確信を有する事は、讀者に斷言し得るが、南方支那人に接した後の著者の北方支那人よりの印象は遺憾乍ら、失望と不平であつた事を茲に告白せざるを得ない、冀くは廣東國民政府北伐軍の北支那侵略が、武力のみによらず、思想により精神により南方支那人の美點と長所を齎らし、扶殖せん事を全支那國民の爲め祈るものである。



大正十五年十二月七日印刷  
大正十五年十二月十日發行

支那人氣質奧附  
定價金四拾五錢

著者

濱野末太郎  
東京市外瀧野川町西ヶ原九三〇

發行者

合資世界出版社

代表者

堀江定四郎



印刷者

石原勘一郎  
牛込區早稻田鶴卷町三〇八

印刷所

文陽社

發行所

東京市外瀧野川町  
西ヶ原九百三十番地

合資社

世界出版社  
振替七五二二三番



# 「世界の眞相を國民へ」

これ我が社の目的であり聲明である。永い間外國に住んだ我が社同人は、諸外國に對する理解を深めると同時に、祖國愛の念一層高まるえた。次いで他邦人が祖國を知るより深く、より早く他邦をを覺知らねば祖國の不利であり不幸である事を痛感した。同人が萬事を意とせず、唯だ必要を生命として本社を創立したのは之が爲めである。

神紀二千五百八十六年十一月

世界出版社同人

近世刊豫告

近世英國外交の百年

英人グーチ及マスターマン著  
堀江定四郎譯

現代支那人物月旦

濱野斗南著

飽ま民衆定價

## 知れ米國の青春男女！

大敵が大身方か、心ある日本人は擧げて米國の一舉一動を監視す。一億米人の心、日本に對して亦之と同一也。此の大疑問國あめりかの次代國民の家庭生活、社交作法及び其の戀愛表現を綺麗に有の儘に映寫せるは本書なり。

堀江定四郎譯

## 米國女百問答

四六版美裝  
定價八拾錢  
送料六錢

在米幾春秋の譯者は、太平洋彼岸の隣國富裕天下に冠たる米國、世界第一の女子教育國、隨つて女天下の共和國たる亞米利加を縦横に研究し、裏より表より觀察して餘す所なし。本書は其の一幕也。

聽け譯者のマイクロホンに吹き込む一百米女の交響樂！

東京市原九〇番地 世界出版社 振替 東京 番三二二五七



現代日本の最大憂患は對内的には民族的創造性麻痺して西洋模倣一點張の東洋國と化し、對外的には自主獨立の大精神枯れ率先の勇敢空しく、事毎に西洋に迎合せんと齷齪してゐる事である。「呑まれないで能く外國を知れ」を警句としてゐる著者は、十年の歐視米察を終へて歸朝し、祖國の此の現象を視て黙するに忍びず、嗚呼本著を世に捧ぐるに至つたのである。末句に曰く「新興の日本民族よ、追隨より自主へ、模倣より創造へ、部分より大局へ、末節より原理へ！」全卷を通じ、著者の骨鳴り肉叫ぶを聴く、知れ之を繕いて日本人の日本を！

堀江定四郎著

## 自主的日本の建設

重版四六版美装  
定價 金五拾錢  
送料 金四錢

國民新聞曰く、非自主、非創造、退嬰の日本文明を嘆じ、其の事實を指摘し、日本人の奮起を促したる大獅子吼である。云々。  
中外商業新報曰く、日本の自主的建設の第一階梯として先づ日本の消極、退嬰の五大事實を論じ、四六版僅々八十余頁のものだが警世の文字で溢れてゐる。云々。  
下野新聞曰く「今日の日本を遺憾なく批判し、七千萬日本民族に向ふべき方向を示してゐる。云々。  
讀め憂國の士女！二雜誌は之を轉載して破れるが如き喝采を博せり！

東京市原ケ西  
九〇番  
世界出版社  
振替  
七五二二  
番  
東京  
三番



549  
214



終